

[論 文]

英語における接続副詞 *however* の機能構文論

鈴木博雄

1. はじめに

英語の接続副詞 (conjunct) (e.g., on the other hand, and yet, somehow, therefore, etc.) の生起位置は文頭が標準的であるが、文中央部にも生起する傾向が相当に観察され、文末も、口語・文語共に、生起可能であることが多い。本稿で取り上げる *however* の文中における位置別生起頻度も、他の接続副詞と同様の傾向が観察される¹。

英語使用者が *however* の生起位置を3つに使い分けている理由については、これまで、個々の使用者の好み(文体上の癖)の問題に還元される傾向があった。一方、同一の話し手・書き手が文脈に応じて、*however* の生起位置を使い分けていると考えられる証拠も提出されている。その1つとして、Davis (2015) による *however* の生起傾向に関するジャンル分析の結果を紹介しておきたい。同論文(Ch. 6.2.2)は、医学論文研究用コーパス(MRA corpus)を使い、論文展開(IMRD structure)における *however* の生起頻度数(100,000語換算)を求めている。同論文の表6.3(pp. 199-200)から頻度割合を算出すると、Introduction: 約31%, Methods: 約4%, Results: 約23%, Discussion: 約41%となる。各セクション(section)内部における *however* の生起位置は、Iセクション、Mセクション、Rセクションでは、文頭は約90%、文中央部は約10%、文末は約2%であり、ほぼ同様の割合であった(表6.4, 6.6, 6.8 (Ibid.: 203, 204, 206)より筆者算出)。一方、Dセクションでは、文頭は52%、文中央部は33%、文末は15%である(表6.10 (Ibid.: 208))。

上述の割合で注目すべきなのは、論文執筆者の主張が述べられ易いIセクションとDセクションに *however* が使用される傾向が高いということと、Dセクションでは *however* が文中央部でも使用される傾向が高まり、文末生起についても約15%と、他のセクション(I, M, R)の各、約2%と比べれば生起頻度が高まっているということである。Dセクションにおいて、*however* の分布が相対的に多様化する理由として、論文構成上、Dセクションは、執筆者が論文公開によって、研究分野の発展に、どのように独自の貢献を果たすことができたのかということ、最も明確に主張したい部分であることが挙げられよう。

Davis による *however* に関するジャンル分析の結果は、英語使用者は *however* の使用に際し、3カ所の生起位置を使い分けていることを示唆している点で、今後の副詞論の発展に貢献する成果と言えるが、*however* の機能上の相違については、他の先行文献と同様に、必ずしも、明確な結論が導き出されてはいない。そこで、本稿では、多重主題形成及び副詞述語論の観点から、*however* が生起位置に応じて、どのような機能を担い得るのかということについて論じる。

2. *however* の概念規定

第3章及び第4章で、*however* の生起位置(文頭、文中央部及び文末)と機能の対応関係について論

じるに先立ち、本章では、however の概念規定を行う。英語副詞論の古典的名著 Greenbaum (1969) は、however の定義を (1) のように規定する。

(1) *However* expresses some reservation with respect to what has been mentioned previously.

Sometimes there is a contrast between units in the two clauses, so that *however* may be very similar to *on the other hand* though adding concessive meaning. The positioning of *however* may focus the unit being contrasted [...]

(however は前に述べたことについての何らかの保留を表す。時には、2つの節に含まれる要素の間に対照が見られることがあり、従って、however は譲歩的な意味は加わるが、'on the other hand' (他方) に極めて類似したものとなる。however を置くことによって、対照される要素が明確にされるのである。)

(Greenbaum (1969: 65), 括弧内の翻訳は、郡司・鈴木 (1983: 95) による。下線筆者²)

(1) における reservation (保留) は、文頭及び文中央部の *however* を定義する場合の重要概念である。一方、*however* が文末に生じた場合、聞き手が *however* を知覚した時点で、同語を含む文の中核命題が既に解釈されており、先行命題の解釈を「保留」する必要はなくなる。また、文頭及び文中央部の *however* は多重主題 (multiple themes) の1つであるのに対し、文末の *however* は、コメント付加要素として、題述 (rheme) の一部に含まれる。つまり、(1) は、文頭及び文中央部の *however* の定義としては的確であるが、文末に生起する *however* も含めた定義としては必ずしも十分とは言えない。そこで、本稿では、*however* の分布 (「文頭」, 「文中央部」, 「文末」) をより正確に反映させるために、(1) を (2) のように再定義する。

(2) [先行命題 P + HOWEVER + 後続命題 Q] において、HOWEVER は命題 Q を反映する文の文頭、文中央部、文末のいずれかにコンマ・イントネーションを伴って、*however* として具現化される。文頭及び文中央部においては、命題 P の内容を「譲歩」して、一旦、認可しながらも、*however* を知覚した時点で、内容の認可を「保留」し、命題 Q の内容を理解した時点で、命題 P と命題 Q からの確な「対照項」の対を聞き手に抽出させる。一方、文末の HOWEVER は、命題 P の内容を「譲歩」しながらも、内容の認可を「保留」する機能は無く、聞き手に命題 P と命題 Q の間に「対照項」が存在することを再認識させる機能を担う。

(2) における先行命題 P は、後続命題 Q が真であることの説得力を高めるための情報源であることを合図する機能を担う。情報源である命題 P の内容を一旦、認めてから、一時的に、その妥当性を保留³し、後続命題 Q を提示した時点で、命題 P の内容に修正を加える。そうすることによって、後続命題 Q の内容の説得力が高められる。

3. 文頭及び文中央部における **however**—多重主題形成機能及び音調境界確定機能—

前章では、聞き手が、先行命題 P の解釈を一時的に「保留」し、後続命題 Q の内容を踏まえてから、命題 P を再解釈し、2つの対照項を的確に知覚することを促す *however* の概念規定を行った。本章で

は、「多重主題形成」と「音調境界明示」の2つの道具立てによって、文頭及び文中央部に生起する *however* の談話構成機能について論じる。

3.1 *however* の多重主題形成機能

機能言語学では、文は文頭の主題 (theme) から始まり題述 (rheme) が続くと考えられる。主題は、「メッセージとしての文 (clause) の出発点に置かれ、話題として扱われる事柄 (what is being talked about, the point of departure for the clause as a message)」と定義される (Halliday (1967: 212))。加えて、複数の (下位) 主題で構成される主題群を、多重主題 (multiple themes) と言う (詳細は、Halliday (1985: §3.5), Halliday and Matthiessen (2004: §3.4) 等を参照)。本稿が分析対象とする *however* も、文頭及び文中央部に生起する場合、多重主題の1つと見做すことができる。具体的には、(3) の〈1〉から〈4〉に生起する *however* が主題の1つとして機能している (文末の〈5〉に生じる *however* は題述の一部を形成する (詳細は第4章で論じる))。

(3) 〈1〉, in New York City, 〈2〉, garbage disposals, 〈3〉, were, 〈4〉, legally banned, 〈5〉.

(However, in New York City, garbage disposals were legally banned.)

(括弧内の用例はインターネットにて採取⁴)

ここで、*however* の分布可能な理論上の位置を、(4) にまとめておく。(4) において、〈1〉から〈7〉が文頭及び文中央部に *however* が生起する位置である。なお、〈1-a, b〉と〈2〉は順に、①[*However*, in that city,], ②[*However*, the city hall], ③[*In that city*, *however*,] という記号列によって具現化される (①, ②は文頭に、③は文中央部に *however* が生じる。文中央部の *however* は〈2〉に加え、〈3〉から〈7〉にわたって分布する。〈8〉には文末の *however* が生じる)。

(4) [[〈1-a〉,] [{in/In that city, 〈2〉 / 〈1-b〉,}] [the city hall, 〈3〉, will, 〈4〉, have, 〈5〉, been, 〈6〉, being, 〈7〉, rebuilt to a great extent, 〈8〉]]]

(In that city, the city hall will have been being rebuilt to a great extent.)

(英文筆者作例)

(4) の括弧内の文が発話として生起する現実の文脈は想定し難いが、文法的に可能な文であるので、生起可能性は理論的には全く不可能なわけではない。(4) における助動詞 (will, have-en, be-ing, be-en) のうち1つあるいは2つ程度含む文は現実に自然な使われ方をしている。ここでは、助動詞を2つ (be-ing と be-en) 含み、*however* が文中央部に配置されている用例として、(5a) を1例、挙げておく。なお、(4) における助動詞も、多重主題形成に参与可能と考える⁵。例えば、(5b-1) の題述 (rheme) 内の②を主題化の目的で、①に移動させると、(5b-2) のような解釈が可能になる。

(5) a. Progress is being, however, made in various directions, one of them being the introduction of techniques able to model data that cannot be properly analyzed with simpler linear regression models. (インターネットにて採取⁶)

b-1. [[MULTIPLE THEME [In that city,] [the city hall] [①will have been being,] [however,]]] [RHEME

[② will have been being] [rebuilt to a great extent]]. (英文筆者作例)

- 2. とは言え、あの市では、市役所が、ある時期に一定期間何らかの影響を受けていると予想するならば、それは大規模改築である。(【文脈】〈市の財政が上向いて来ているからと言って、数年後の市役所の改築の規模は予想困難である。〉という旨の発言が直前でなされた、という架空の文脈)

(3) 及び (4) に対する考察から、多重主題構造における however の生起位置は (6) の4パターンに分類できる。更に、文頭及び文中央部の however の機能は、(7) のように規定することができる。

(6) a. 文頭の however :

- 1. [MULTIPLE THEME However + 主語 NP] [RHEME PredP]
- 2. [MULTIPLE THEME However + 副詞句 + 主語 NP] [RHEME PredP]

b. 文中央部の however :

- 3. [MULTIPLE THEME 主語 NP + however (+ 副詞句)] [RHEME PredP]
- 4. [MULTIPLE THEME 副詞句 + however + 主語 NP] [RHEME PredP] (cf. PredP: predicational phrase⁷)

(7) a. 文頭の however :

先行命題 P の内容を譲歩しながら、P と後続命題 Q に対照項が存在することを合図する。

b. 文中央部の however :

主語 NP または副詞句との対照項が先行命題 P に存在することを合図する。

however の機能規定 (7) は次の (8) を含意する。

(8) a. 文頭の however は、「文頭最大被修飾作用域 (linear modification) の原則」が適用されるため、対照項の対を的確に予測することが困難な場合がある⁸。

b. 文中央部の however は、音調境界を明示的に形成するため、文脈を読み込む前に、主語 NP または副詞句を対照項の対の1つとしての的確に予測できる。

(8a) における「文頭最大被修飾作用域 (linear modification)」は、Bolinger (1952) によるよく知られた概念で、本稿に即して纏めるならば、要するに、文頭要素は、それに続く構成素によって、その意味が限定 (modify) される最大の作用域 (scope) を形成するという主旨の構文解析上の原則である。一方、(8b) の「音調境界確定機能」は、文中央部の however による (命題 Q に内包される) 対照項の確定に強い影響を与える。

3.2 however の音調境界確定機能

前節で述べた「文頭最大被修飾作用域の原則」に依れば、(9) における however を限定 (modify) する中核的概念は、先行命題 P の項目と後続命題 Q において対照される項目の候補 ([garbage disposals], [were legally banned], [in New York City]) のうち文脈上、最も強い音調核 (文強勢) が置かれる意味単位である。(9) の場合、中核的概念の候補の絞り込みは、先行命題 P を含む文脈によって

決まる。例えば、先行命題 P が (9b) であったとすれば、〈家庭ごみの処分の方法に関する地域差〉を記述するにあたり、〈アメリカ東部の大半の市の事情〉と〈ニューヨーク市の事情〉を対比させていることになる。よって、対照項の対の 1 つは、[in New York City] と考えてよい。なお、文頭の however は、その直後に音調境界⁹を持ち、(10a) のような単独の意味単位を形成する機能を有すると言える。したがって、独立した意味単位である (10a) の however は、先行命題 P (= (9b)) により、(10b) のように意味表記することができる。

- (9) a. However, garbage disposals were legally banned in New York City.
 b. In most cities in the eastern United States, households were allowed to dispose of the garbage. (a. は (3) のインターネット採採用例を改変, b. は筆者作例)
- (10) a. / How[^]ever, #[^]garbage dis[^]posals / were[^]legally[^]banned # in / New[^]York[^]City #
 (註：取り消し線は、(9) の文脈上、however に制限 (modification) を加えることができない意味単位であることを表示するものとする。この場合、however は [in New York City] により最も強い制限を受ける。)
 b. however = [THOUGH HOUSEHOLDS WERE ALLOWED TO DISPOSE OF THE GARBAGE IN MOST CITIES IN THE EASTERN UNITED STATES]

一方、(11) の場合、文中央部の however の直後に音調境界 ((12) を参照) が形成されているが、直前に副詞句や主語 NP が先行しているので、文中央部の however は挿入句 (parenthetical AdvP) であり、独立した意味単位というよりは、[In New York City, however], [Garbage disposals, however] のように、直前の語句の意味を補足する従属的な意味単位であると考えられる。よって、文中央部の however には、「文頭最大被修飾作用域の原則」は適用されない。

- (11) a. In New York City, however, garbage disposals were legally banned.
 b. Garbage disposals, however, were legally banned in New York City.
- (12) a. In / New[^]York[^]City, / how[^]ever, #
 b. / Garbage dis[^]posals, / how[^]ever, #

以上、前節及び本節で論じたことは、(13) のように要約することができる。

- (13) a. 文頭に生起する however を (聞き手が) 知覚後の「対照項の対」の確定は、「文頭最大被修飾作用域の原則」により、先行命題 P と後続命題 Q を中心に形成される談話の流れ (文脈) に依存する。
 b. とは言え、however が多重主題形成機能及び音調境界確定機能は、同語の文頭及び文中央部における生起を裏付ける動因となる。
 c. 文中央部に生起する however は、その音調境界確定機能により、直前の副詞句や主語 NP が命題 P における意味単位と対照項の対を成すことを的確に合図することができる。

次節では、(13)を踏まえ、実際に使用された however の分布と機能の対応を考察する。

3.3 実例考察

3.3.1 多重主題構造左端の however

多重主題構造左端（文頭）の however が合図し得る「対照項の対の典型的な組み合わせ」は、(14)の2つの場合に分類することができる。

(14) a. however に主語 NP が後続する場合：

- 1. however は、〈「既知・旧情報」としての「主語 NP」〉と〈命題 P に含まれる意味単位〉を対照する。
- 2. 〈命題 P に含まれる意味単位〉と〈命題 Q の主語 NP 以外の意味単位〉を対照する。

b. however に副詞句主題が後続する場合：

however は、〈「既知・旧情報」としての「副詞句主題」〉と〈命題 P に含まれる意味単位〉を対照する。

however に主語 NP が後続する (14a) の場合、対照項の組み合わせは (14a-1) と (14a-2) の2つに細分されるものの、(14a-1) と比べ (14a-2) の組み合わせが生じる頻度は相当に低い¹⁰。一方、however に副詞句主題が後続する (14b) の場合、副詞句主題に音調境界が形成されるため、however の作用域が同主題に限定される。それ故、同主題を対照項の対の1つに絞り込むことができる。以下、(14)を裏付ける実例を挙げる。実例には和訳を付し、対照項に二重下線を引く。

(15) は、however に主語 NP (the company's managing director, Len Clayton) が対照項の1つとして後続している (14a-1) の場合である。なお、命題 P におけるもう1つの対照項は、Research by Swan National Leasing であるが、「スワン・ナショナル・リース社で調査に係わった社員」のように解釈する必要がある。

(15) ①Research by Swan National Leasing into diesel take-up trends among its customers has found a slight renewal of interest by employers. However, ②the company's managing director, Len Clayton, notes that fleet operators are finding the generally shorter service intervals an inconvenience.

(①スワン・ナショナル・リース社の調査によれば、ディーゼル車を導入したい企業の経営者が車両導入への関心を持ち直しつつある。とは言え、②同社最高経営責任者のレン・クレイトン氏は、総じて車両整備サービス間隔が短くなっていることに、ディーゼル車の管理者たちが不便さを感じていると指摘する。)

(BNC, 和訳筆者, 二重下線部は対照項の対)

一方、(16) は however に主語 NP (many of my colleagues) が後続するものの、同主語 NP が対照項の1つと解釈できない例である。対照項の対は、二重下線部であり、しかも、両者を基に、「AEAが声明を発表するタイミングの適切さ」と「声明を伝えられた（話し手の）同僚が感じた声明内容の不十分さ」が対照されているということを推意せねばならない。

(16) 'It was clear that there were rumours about and AEA had to make a statement. (1)The timing was good, I felt. However, many of my colleagues were a little concerned that (2)they were being told of the final outcome, but nothing on the short term effects.'

(「噂が流れているのは明白なので、AEAは声明を発表しなければならなかったのです。(1)このタイミングでよかったと思います。とは言え、(2)私の同僚の多くは、最終的な結果を聞かされているだけで、短期的な影響については何も伝えられていないことに少し懸念を感じていました。」)

(BNC, 和訳筆者, 二重下線部は対照項の対)

次に、(17)は、howeverの直後に、副詞句主題が後続する場合である。副詞句主題は音調境界を形成するので、howeverが形成する最大の作用域は副詞句の音調境界に限定され、したがって、副詞句主題が対照項の1つになると的確に予測できる。

(17) The ban was immediately defied with (1)the bombardment by Serbian aircraft of Gradacac and Brcko on Oct. 10. However, (2)under intense international pressure at the Geneva conference, supported by US President George Bush's Oct. 2 announcement that the USA was prepared to participate in enforcing the ban, Karadzic finally on Oct. 13 agreed to the grounding of all combat aircraft and their transfer from Bosnia to the FRY (Serbia being the only party to have combat aircraft).

(禁止令 [筆者註：軍事飛行禁止令] は、(1)セルビア軍機がグラダツとブルッコに爆撃した 10月10日に急遽、破棄された。しかしながら、(2)ジュネーブ会議では厳しい国際的非難が相次いだ。これに先立ち、10月2日に、ジョージ・ブッシュ米大統領が禁止令の執行にいつでも署名をすると発表しており、同発表もセルビアに対する国際的非難を激化させる動因となっている。カラジッチは10月13日、ついにすべての戦闘機を飛行禁止にし、ボスニアからユーゴスラビア連邦共和国に引き渡すことに合意した (セルビアだけが戦闘機を保有していたのである)。

(BNC, 和訳筆者, 二重下線部は対照項の対)

3.3.2 多重主題構造左端以外の however

§3.3.1では、多重主題左端 (つまり、文頭) に生起する however の談話構成機能について考察した。つまり、howeverの直後に主語 NP が後続する場合、対照項の対を確定するのは、文脈に依存するが、(17)のように、直後に副詞句が生起する場合、副詞句自体が先行文脈における意味単位と対照項を成すことを目的としてその本来的な位置 (VP 内部) から移動 (Move)¹¹するのが原則なので、副詞句が対照項の対のうちの1項になる可能性は高い。本項では、howeverが多重主題左端及び文末以外の位置 (つまり、文中央部) に生起する場合の機能 (18) について、实例に依り考察する。

(18) a. however が主語 NP に後続する場合：

however は、〈「既知・旧情報」としての「主語 NP」〉と〈命題 P に含まれる意味単位〉を対照する。

b. however が副詞句主題に後続する場合：

however は、〈「既知・旧情報」としての「副詞句主題」〉と〈命題 P に含まれる意味単位〉を対照する。

まず、主語 NP に後続する however を含む用例 (19) を見てみよう。however の音調境界形成機能により、[/ Su^nil, / how^ever, #] が意味単位を形成し、Sunil (筆者註：この小説では Sunil は男娼 (rent boy) として描かれている。) と先行命題 P における they (=rent boys) が対照項の対を成す。ただし、Sunil と they がどのような意味で対照的なのかということについては、この文節 (passage) では、Sunil についての特徴 (文学という共通の嗜好と強い愛情欲求を発見できたために私と相愛の関係になった。) から、they の特徴を「推意」して、対照項の対を解釈する必要がある。この場合、〈恋をする気持ちになれる Sunil〉と〈墮落していて恋をする気持ちになれない他の男娼たち〉が対照されているのである。

- (19) Much of my paltry income goes on rent boys—one of my few weekend leisure activities. ①They're already corrupted. ②Sunil, however, fell in love with me and I with him through our discovery of a common taste in literature and a strong need for affection.
(若い男娼と遊ぶことぐらしか週末の楽しみを持たない私は、安月給の大半を無駄に費やしていた。
①男娼たちはすでに墮落している。ところが、 ②スニルと私は文学という共通の嗜好と強い愛情欲求を発見できたために、相愛の関係になった。) (BNC, 和訳筆者、二重下線部は対照項の対)

次に、用例 (20) は、副詞句主題に後続する however を含んでいる。(19) における however の場合と同様に、however の音調境界形成機能により、[In / ^Mexico, / how^ever, #] が意味単位を形成し、[In Mexico] (メキシコはラテンアメリカに含まれるので、「旧情報」と見做せる) と先行命題 P における [In several Latin American countries] が対照項の関係にある。

- (20) The church's view, that marriages sanctioned by religious ritual should not be broken, is reflected in divorce laws. ①In several Latin American countries there is no legal concept of divorce. ②In Mexico, however, where the state broke with the church quite violently during the revolution, divorce is possible (and, indeed, in some places very easy).
(宗教的儀式によって認められた結婚は破棄してはならないという教会の考え方は、離婚法にも反映されている。①同じラテンアメリカでも、離婚という法的概念がない国もある。とは言え、 ②メキシコでは、革命時に国家と教会が激しく対立した経緯があり、離婚は可能である (実際、地域によっては非常に容易である)。(BNC, 和訳筆者、二重下線部は対照項の対)

以上、however は音調境界を形成するため、その直前の主語 NP や副詞句が対照項の 1 つになる可能性が高いということについて論じた。

4. 文末の however—however 述語論—

文末の however も、文頭及び文中央部の however と共通の機能 (21) を有していると言えるが、

(22b) は、(22a) とは対照的に、however が文末に生起している以上、同副詞は主題というよりは、むしろ、題述構造に含まれており、(22c) のような主題・題述構造を前提とした分析が有益である。

- (21) however に先行する命題 P の内容が事実であることを認めることに譲歩しつつ、同命題内容と、however を含む後続命題 Q の内容との間に対照項を見出すことができることを合図する。
- (22) a. However, garbage disposals were legally banned in New York City. ((9a) を再掲)
b. Garbage disposals were legally banned in New York City, however.
c. [[_{THEME} Garbage disposals] [_{RHEME} were legally banned in New York City, however]]

つまり、コンマ・イントネーションを伴って題述右端（文末）に置かれた however の情報特性は、文末焦点というよりは、however を除いた題述の主要情報に対する補足コメントと考える（Halliday (1985: 81-83) 及び Halliday and Matthiessen (2004: 132-133) を参照）。Halliday らの言うコメント付加詞（comment adjunct）や接続付加詞（conjunctive adjunct）¹² が、「文末ではコメントを補足する」という考え方は、副詞を述語（predicate）として分析する形式意味論の発想（例えば、Davidson (1967), McConnell-Ginet (1982)）と通底するところがある。

さて、Klumm (2021: 415) は文末の however に「自説修正（self-correction）」という機能を与えている。however が、「自説を修正する」という意味上の述語の機能を担うと仮定するならば、論理述語の however の直前の命題 Q とその先行命題 P を結束（cohere）させる「情報の流れ（flow of information）」として、(23) のようなスキーマをデフォルト¹³ として表示することができる。

- (23) [命題 P] は事実である。〈[命題 P] によって具体化（characterize）される [命題 Q の主題 T]〉ではあるが、〈命題 Q の題述 R〉 [_{PredP (however)} ~~ではあるが~~, ~であるのも事実である]。つまり、[命題 S] なのである。

(23) の PredP における述語「ではあるが、~であるのも事実である」は不連続形態（discontinuous morph）である。加えて、2重取り消し線付きの [~~ではあるが~~] は、(23) の主題 T に右方付加されるものとする。ここで、however の「自説修正機能」を踏まえ、実例 (24) を考察してみよう。

- (24) Briefly lifting his cap, ^①the ginger giant produced, in foreign-accented English, a decidedly non-committal reply. ^②The large lady was not to be put off, however. 【#】 ‘Tell me,’ she said, leaning forwards with a smile at once coy and overwhelming, ‘I must know. Are you Mr Sven Hjerson, the famous Finnish detective? I mean, you must be. I saw your picture in the paper here just last week. You’ve been helping the Vatican in some mysterious business or other, haven’t you?’

(^①赤毛の大男は帽子を少し持ち上げ、外国語訛りの英語で、明らかに言質を与えたくないというような返事をした。そのような態度を取られ、かえって、^②大柄な女性は引き下がろうとしなかった。

【#】口調に穏やかさと厳しさを織り交ぜながら、笑みを浮かべてはいるものの、詰め寄るような勢

いで、女性は、「はっきり仰ってください。わかっているんですよ。あなたはフィンランドの名探偵、スヴェン・イェルソンさんですよ。凶星でしょ。つい先週も、この新聞であなたの写真を見ているんです。パチカンの何やらわけのわからない仕事を手伝われているようですね。」と問い詰めたのである。(BNC, 和訳筆者, 二重下線部は対照項の対, 【#】は改行位置)

(24) の冒頭から第 2 番目の文において, *however* を多重主題構造に含ませ, 文頭または文中央部に配置した方が命題 P と命題 Q の論理関係がより明確になるにも拘わらず, 何故, *however* を文末に生起させているのだろうか。その理由は, 命題 P と命題 Q の談話の流れを形成する上で, *however* を多重主題構造に含めるよりも, *however* 以外の主題を命題 Q で用いた方がよいと話し手 (ここでは, 書き手) が判断したからに他ならない。

つまり, 書き手は, 用例 (24) の第 2 文を産出 (produce) する際に, (25) の 2 つの選択肢のうち, (25a) を選んだのである。(25a) では, 〈自説①: 赤毛の大男 (the ginger giant: 以下 GG) は大柄な女性 (the large lady: 以下 LL) にとって不本意な返事をした。〉における GG の視点 (empathy) から, 〈自説②: LL は GG から明確な言質を取りたいという態度に出た。〉における LL の視点に, 「視点を変更することによる自説修正」という論理述語としての機能が *however* に観察される。

- (25) a. *however* を含む命題 Q の主題である 〈大柄な女性 (LL)〉と, 先行命題 P における 〈赤毛の大男 (GG) の言質を与えたくないというような返事 (noncommittal reply)〉との間に, より強い意味的な繋がり (coherence) を持たせ, 〈返事を受けた女性の態度〉を新情報として提示する。
- b. 先行命題 P における 〈GG の, 言質を与えたくないというような返事 (noncommittal reply)〉と, 〈[そのような態度を取られた] とは言え (however)〉との間に, より強い意味的な繋がりを持たせ, 命題 P と命題 Q に対して, 「譲歩」という論理的結合操作を行う。

一方, (25b) では, 〈自説: LL は GG から返事を受けただけども, 返事の仕方に納得しなかった。〉は一貫して LL の視点で描写されているという点において, 「1 つのまとまった自説」としての解釈が相応しい。よって, この文脈での, 文頭・文中央部の *however* に, 「自説修正」の機能を担わせることは困難である。

以上, 本章では, 要するに, 文末の *however* は, 話し手が視点を変更して, 「自説を修正する」という論理述語の機能を担い得ることについて論じた。

5. おわりに

本稿の要点は, (26) の 3 点である。

- (26) a. 文頭の *however* は, 「文頭最大被修飾作用域 (linear modification) の原則」から対照項の対の確定を文脈に依存する傾向が強い。とは言え,
1. *however* に後続する主語 NP が音調境界を形成する場合, 同 NP を対照項の 1 つと見做せる可能性が高い。

2. however に副詞句が後続する場合、この位置の副詞句は場面設定の効果を高める目的で音調境界を形成するので、however の作用域は当該副詞句に限定され、同副詞句を対照項の1つに絞り込むことができる。

b. 文中央部の however は音調境界を明示的に形成するため、主語 NP 及び副詞句を対照項の1つに絞り込むことができる。

c. 文末の however は、話し手が（自説修正の目的で）論理述語としての機能を担わせたい文脈において、文末に生起する傾向が高まる。

本稿では、理論言語学における機能論的構文解析論 (functional sentence perspective) の道具立てを用い、however の分布と談話構成機能の対応関係について論じた。今後、量的言語研究に携わる者が大規模なコーパスを駆使し、however の生起実態をより正確に捉えるための基礎的知見を提供できたものとする。

【註】

- 1 接続副詞の統語的分布傾向については、例えば、Greenbaum (1969: 78-80), Halliday and Matthiessen (2004: 132-133) を参照。なお、Biber et al. (1999) は、コーパス分析の結果として、会話 (conversation) では文頭 55%, 文中央部 2.5% 以下、文末 40%, 論説文 (academic prose) では文頭 50%, 文中央部 40%, 文末 10% という生起頻度割合を示しており (p. 891, 表 10.18), 会話における文中央部と文末の生起頻度が Halliday や Greenbaum の一般論とは対照的な数値である。これは、会話における however の生起頻度が極めて少ないために (100 万語中、会話 (イギリス英語) では 55 回以下、論説文では約 1,100 回 (Biber et al. (1999: 887) の表 10.17 を参照)), 上の二人のコメントは書き言葉を意識したものであるからであろう。加えて、however の分布も他の接続副詞と同様であることについては、例えば、Ranger (2021) は、BNC から接続副詞としての however を 1,000 トークン含むサブコーパス (1000-word subcorpus of the BNC) を作成し、その分析結果を示している。同論文の表 4 (p. 11) から、however の生起頻度割合を算出すると、文頭 50.3%, 文中央部 40.8%, 文末 4.2% となる。
- 2 本稿の用例等に引いた下線は、断りが無い限り、筆者によるものである。
- 3 鈴木 (2014) において、筆者は Wickboldt (2000) の知見を「事象完結一時取消」という用語を用いて導入している。本稿での「保留」は「事象完結一時取消」と軌を一にする概念である。
- 4 <https://sanitary.nyc/garbage-disposals-new-york-city/> (最終確認日: 2023.7.8)
- 5 Klumm (2021: 特に 415) は、文中央部の however は主題 (theme) または題述 (rheme) を対照項の1つとする旨を述べている。本稿では、文中央部 (多重主題構造) に生起する however は、主題の構成素を対照項の候補とするものとする。その理由は、助動詞要素を主題と題述のどちらに含めるかということの視点が Klumm と異なるからである。筆者は、助動詞要素も題述の位置から主題化の目的で、多重主題構造内部に移動し得ると考える (註 7 も参照されたい)。
- 6 <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29713298/> (最終確認日: 2023.7.8)
- 7 PredP (述語句) には助動詞要素が含まれる。助動詞要素を主題化して多重主題構造内に含めることの可能性については、本文における (5) の直前で記述したとおりである。
- 8 しかし、文頭の however に副詞句が後続する場合、副詞句の音調境界形成機能により、副詞句を対照項の1つと見做せる。問題は、主語 NP が後続する場合である (詳細は、本文における用例 (9), (16) に関する記述を参照されたい)。
- 9 本稿で用いるイントネーション表記は以下の通りである。

- / : 音調単位の頭部開始点 (onset), # : 音調境界, ^ : 上昇下降調, _ : 音調核 (nuclear accent) の位置
- 10 総じて、主部は述部によって特徴づけられ、卓立（前景化）されるという情報構成上の原則によるためであろう。参考までに、however に主語 NP が後続する用例を 10 例、COCA からランダムサンプリングし、内容を確認した結果、「対照項の対の 1 つ」が 10 例とも、主語 NP であった。
- 11 コピー (copy) による「併合 (Merge)」とも言える。
- 12 Greenbaum (1969) の離接詞 (disjunct) と接合詞 (conjunct) に相当する。
- 13 (23) をデフォルトとしたのは、末部の〈つまり、[命題 S] なのである。〉という文言は、不要な場合もあるだろうが、命題 Q により「自説修正」した話し手は、修正理由を「命題 S」(1 つあるいは複数の命題) として追加する傾向が高いからである。その証左として、文末に however が生起する命題 Q を具現化した文の場合、文頭・文中央部に生起する however の場合に比べて、その平均語数が少ないということを挙げておく。少ない語数で「結論的な事」を述べておいて、直後に、「命題 S」を追加して、「命題 Q」の内容を具体化すると考え、(23) の末部に、〈つまり、[命題 S] なのである。〉を表示した。なお、参考までに、however を文頭、文中央部、文末に含む用例を 15 例ずつ、BNC からランダムサンプリングし、その平均語数を算出した結果は、順に、22.8 語、20.2 語、8.6 語であった（各用例中の however は語数から除く）。

【参考文献】

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Bolinger, Dwight (1952) Linear Modification. In *PMLA* 67, 1117-1144. Reprinted in Isamu Abe and Tetsuya Kanekiyo (Eds.), *Forms of English*, 279-307. Tokyo: Hokuou Publishing Company, 1965.
- Davidson, Donald (1967) The Logical Form of Action Sentences. Reprinted in Donald Davidson (Ed.), *Essays on Actions and Events*. 105-121. Oxford: OUP, 2011.
- Davis, Richard H. (2015) A Genre Analysis of Medical Research Articles. PhD. University of Glasgow.
Available online at <https://theses.gla.ac.uk/6724/>
- Greenbaum, Sidney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longmans. (郡司利男・鈴木英一 監訳 (1983) 『グリーンボーム 英語副詞の用法』研究社)
- Halliday, Michael A. K. (1967) Notes on Transitivity and Theme in English, Part 2. In *Journal of Linguistics* 3, 199-244.
- Halliday, Michael A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Halliday, Michael A. K. and Christian Matthiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Hodder Arnold.
- Klumm, Matthias (2021) Meaning-to-Form Mismatches in Functional Discourse Grammar and Systemic Functional Grammar: A Case Study of the English Discourse Connective *however*. In Lucía Contreras-García and Daniel García Velasco (Eds.), *Interfaces in Functional Discourse Grammar*, 399-432. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- McConnell-Ginet, Sally (1982) Adverbs and Logical Form: A Linguistically Realistic Theory. *Language* 58, 144-184.
- Ranger, Graham (2021) An Enunciative Description of Three Concessive Sentence Adverbs in English: *yet*, *however*, *nevertheless*. In *Anglophonia: French Journal of English Linguistics* 32, 1-22.
Available online at <https://journals.openedition.org/anglophonia/3920>
- 鈴木博雄 (2014) 『英語副詞配列論 様態性の尺度と副詞配列の相関』ひつじ書房.
- Wickboldt, June M. (2000) Some Effects of Manner Adverbials on Meaning. In Carol Tenny and James

Pustejovsky (Eds.), *Events as Grammatical Objects: The Converging Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*, 359-374. California: CSLI Publications.

[CORPORA]

Davies, Mark. 2004-. BYU-BNC. (Based on the British National Corpus from Oxford University Press).

<http://corpus.byu.edu/bnc/>.

Davies, Mark. 2008-. The Corpus of Contemporary American English (COCA): 520 million words, 1990-present.

<http://corpus.byu.edu/coca/>.

(すずき ひろお 英語コミュニケーション学科)